



家庭教育における対話：
親業の手法を用いた対話改善の試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学教育学部旭川校特殊教育特別専攻科障害 児教育研究室 公開日: 2017-07-26 キーワード: 作成者: 早坂, まゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007955

家庭教育における対話 —親業の手法を用いた対話改善の試み—

早坂 まゆみ*

子どもたちのいじめや自殺の問題、離婚や母子家庭など現代家庭に起こっている諸問題は限られた人々のものではなく、すべての家庭が抱えている問題である。本論は文献を通し、現代家族における現状について把握し、家庭再構築のために父親が重要な役割を担っていることを示した。再構築の方法論として対話に注目し、具体的手法を「親業」に求めた。予備的に家庭において「親業」導入を試みた結果、対話を意識することから人間関係の変化の可能性が認められた。

(キーワード：家庭問題 父親 対話 親業)

1. はじめに

筆者は『親業訓練講座』への参加を通して、話し相手に受容され、やさしさと自信を与えられる経験を得た。今まで人間関係の中で受容されたという場面は少なかったように思う。受容されるということは個人として理解され、尊重され、認められることである。私たちの価値観は個人主義へと進んできたように思われるが、個人が利己的に自分のことだけを考えていればいいというものではない。お互いを尊重できてこそ本当の意味での個人主義があり、そういった中にこそ成長と発展がある。

現在、社会一般における人間関係のみでなく、家庭における夫婦関係、親子関係が危機的状況にあるといわれる。

本論は文献を通し、現代家族の現状について述べ、家庭再構築のために父親が重要な役割を担っていく必要があること、また方法論として「対話」に注目しながら、そこに必要な受容的態度について述べる。その具体的な手法を「親業」に求めながら予備的な試みをし、今後の見通しと課題について検討をしていくものである。

2. 現代家族について

(1) 家族の構造と機能の変化

家族のあり方が変わったのは1955年から始まった高度経済成長期以降といわれる¹⁾。第一次産業中心だったわが国が、重化学工業中心にとって変わる産業構造の大転換をなし、人々は職業と住居を変えていくことになる。そんな中で女性の社会進出、出生率の低下、核家族化が進行していった。子どもたちが育つ典型的な家族とは両親と一人っ子が兄弟姉妹がせいぜい一人か二人の都市に住む労働者家族ということになる。

そして家族が以前もっていた生産者としての機能が消失し、消費機能のみの単位となっていく。そんな中で家族が存在するための基礎的機能として、ボッサードは「生殖」「愛情」「子どもの社会化」の三つを上げているが、パーソンのいう「子どもの社会化」と「夫婦の心理的安定化」の二機能とほぼ同じような見解とみることができる。はたして現代家族において、この基礎的機能がみたまされているのだろうか。

子ども自身にとっては家庭が心の基地でありいつでも帰ることのできる場所なのである。少なくとも昔の家庭はそうだった。しかし戦後、

* 北海道教育大学旭川校特殊教育特別専攻科

夫と妻に個人的権利が認められ、結果として親による主体的な結婚、離婚が行われるようになると、子どもにとって家庭が安住の地ではなくなったのである。

また、家族の小人数化と家族員の多忙さ、テレビなどがコミュニケーションの機会を奪い、人間関係の稀薄さに拍車をかけている。このような状況の中で子どもたちの精神安定と健やかな成長は危機にさらされているといえるだろう。

(2) 家庭再構築のために

家族に関しては、子ども、老人、夫婦などに関するもろもろの問題を抱えて「危機」的な状態にあるとする点で現代家族論は、ほぼ共通している。しかし、田中は「伝統的家族」の善さを主張したり、「新しい家族」の在り方を新しい装いで説いたりする「家族復権論」や「家族」を「解体」されるべき「制度」としてとらえ「家族」にこだわる議論を批判する「家族批判論」ではなく、家族生活の不安定・困難・苦悩を直視しながら民衆による人間的な家族の創造を探求する立場をとりたいとしている。²⁾ 筆者も田中と立場を同じくするもので、社会、学校を変革していく前に、基本最小単位である家庭からの意識変革が必要であると考えている。

親たちの悩みを受けてきたある相談室によると、育児に関するもの、家庭の離散、夫婦の不仲、経済破綻など悩みは尽きることがない。窮境を脱し得ぬ喘ぎのなかで、こうした問題に共通した、最も切実な妻と子どもの思いは、「せめて話し合える父親であってくれたなら」という男への願いがある。多くの場合、男の側からも話を聞くそうであるが、それによると「自分もまた懸命に家族と話し合おうと努力している。にもかかわらず、その努力を女・子どもが受入れられないからどうしようもない」³⁾と気持ちにはあれど通じない状態を述べている。

現在の父親の中には、役割についてはっきりとした認識をもっていない者もあるし、自覚していない者も少なくない。⁴⁾

以上のことから家庭改革を試みる視点として、

まず人と人とのつながりを対話改善を通して試みていく方向に加え、父親の役割を問いながら、さらに母親援助の立場から対話の重要性を考えていく。

3. 子育てにおける父親の役割

～対話の視点より

家庭教育における父親の母親に対する援助には父として直接子育てにかかわる場合と、子育てをしている母親を援助する間接的かかわりとがある。

以下に『父親(夫)の育児・家事参加に母親(妻)が不満とする理由』を示す。⁵⁾

表1 父親(夫)の育児・家事参加に母親(妻)が不満とする理由

参加や協力の時間が少ない	58.6%
参加や協力の仕方が下手である	34.5%
実際の参加や協力は無理でも、せめてもう少し家庭や子どもに関心を示してほしい	42.1%
子どもが夫になつかないことが心配である	4.9%
家事・育児を通しての夫婦の話し合いが少ないことに不満を持っている	34.5%
その他	3.8%

『父親の育児・家事参加状況に不満とする理由』で「実際の家事協力は無理でも、せめてもう少し家庭や子どもに関心を示して欲しい」「育児・家事を通しての夫婦の話し合いが少ないことに不満を持っている」という点が注目される。また、母親が父親の育児・家事の参加協力を評価すると、実際に協力した時間、量的なものはもちろんのこと、それと同等以上の基準で精神的な援助を重要視していることがわかる。つまりお互いを理解し、夫婦の絆を深めていく必要があり、ここでいう対話という視点から考えると、まさにそのための方法の一つがそれであるといえる。

4. 対話について

(1) 対話とは

ここでは家庭を再創造していくための一つの方法としての対話について取り上げたい。

対話とは何か。伊藤友宣は「対話はいくまで

も情緒の共有が土台になって成り立つ」「二人の人間が向かい合って人格対等に受容しあうこと」と表現している一方で、「情緒の共有」はありえても「意見の一致」とは異なること、つまりお互いの違いをより明確化することでもある³⁾とも述べている。結局、対話の基本は個を尊重するところにあるという。

個を尊重するという事は相手を認めていくことであり、対話においても受容的態度は重要な要素になると考えられる。

親業創始者のトマス・ゴードンは「子どもがおとなに理解されていると感じる。すると子どもは自分が価値ある人間だという感覚を持つ。理解されているという満足感と自尊心が高まり、おとなに対して肯定的な感情が生まれる。」⁶⁾という。これは対大人についても同じことがいえるだろう。

カール・ロジャーズも受容されていくクライアントの変容について「クライアント自身が最初は自己に対して肯定的かといえば必ずしもそうではなく、むしろ否定的な場合が多いが、カウンセリングが進むうちに自分という人間を肯定的に知覚することができるようになる。」⁷⁾と述べている。

また、平井信義は「情緒の共有」→「自立心」→「適応力」→「知」と人は情緒の共有を土台としながらピラミッド型の発達をなしていくとも述べている。³⁾

このように情緒の安定が心の成長の出発点になることを考えると、やはり受容の持つ意味は大きい。対話を通しての効果はその中における受容的態度によるものが重要なポイントであり、その背景にはあくまでも個に対する尊重がある。

家庭におけるこのような対話は家族が相互に理解しあう方向へと導き、相手や自分自身を肯定的にとらえていけることによって、家庭内のさまざまな問題をも積極的に解決していくための土台をつくっていくにちがいない。

(2) これからの方向

家庭における諸問題を解決していくためには、

家族ひとりひとりの心の安定が必要である。その安定は受容的態度を伴った対話を通して得ることが可能であると思われるが、また一方で結論を出さなければならないような問題に際し、双方が意見しながら話し合わなければならない場面もあると思われる。

以上のことを考えながら筆者自身が提案したいと思っているのは力によらず他人に影響を与える方法⁶⁾、つまり対話の中で説得や指示によって相手に対処するものではなく、あくまで受容的態度のもと、個人を尊重しながら個人の自発性を促す方向を基本としたものである。

対話には多くの手法があると思われるが、特にここで『親業』を取り上げるのは、筆者自身が講座に参加して実体験してきたものであるということが大きく、この手法がどこまで通じるかということを検証していきたいと考える。

5. 親業について

(1) 親業とは

『親業』とは、もともと P. E. T (Parent Effectiveness Training) と呼ばれたもので、アメリカから日本に入って来た時に採用された言葉である。人は子を生めば親になれるが、本当に親になるのは難しい。親を職業と心得て、勉強し、努力してはじめて親になれる。それが『親業』の意味である。⁸⁾

ここでは基本となる「聞くこと」「話すこと」「対立を解く」の三つの方法⁹⁾を中心に説明していくことにする。

1) 聞くこと (能動的聞き方)

子どもが困ったり悩んだりして問題を抱えている時、親が子どもの気持ちに共感しながら聞く態度と技術のことである。

[実例1]

5才の男の子。書道教室に来て、座って文字を書いている。そうしているうちに足がしびれてきたので、母親に訴えてきた。

子：ああ、足が痛いなあ。

親：まだ少ししか書いてないじゃない。頑張

ればできるでしょう！

子：うーん

(このやりとりを三回繰り返したところで「能動的な聞き方」をすることに気付く)

親：そうか。足がしびれて痛いのがいやなのね。(解説とフィードバック)

子：うん、そうなんだ。今度から座布団を持ってこようよ。(と明るく言う)

子どもが発しているサイン(「ああ、足が痛いなあ。」)を親が解説し、フィードバックする(「そうか。足がしびれて痛いのがいやなのね。」)ことを通して解説したことが実際、子どもが感じていることか確認し、共感しながらコミュニケーションを深めていくものである。

2) 話すこと(わたしメッセージ)

親としてしての感情を評価や批判を交えることなく素直に表現する態度や技術のことである。

[実例2]

N君, 8才

毎週土曜日、本人から言い出してお皿を洗っている。今日の夕食はカレーライスだった。しかし、食べたあとすぐに洗わない。母親の私は皿に黄色いしみがつくのではないかとイライラしている。

母：おにいちゃん、カレーライスの皿ってすぐ洗わないと黄色いしみがついてしまうの。お母さん、そうなったら困るの。

(わたしメッセージ)

子：そう、じゃ、すぐ洗う。

上記の場合、母親は否定的な気持ちを表現しているが、例えば「おにいちゃん、黄色いしみがつかないようにお皿をすぐ洗ってくれたら、お母さん助かるんだけど。」という言い方もできる。場合によっては後者の方が心よく伝わる場合が多いかもしれない。

3) 対立を解く(勝負なし法)

親と子が対立した場合、親が負けたり、子どもが負けたりするのではなく、お互いが対等な立場で問題解決をする方法である。その場合、以下に示すような段階をおっていく。

第一段階…問題を明確にする。つまり、お互いの欲求をはっきりさせる。

第二段階…考えられる解決策をだす。その時にはそれぞれの意見に対して決して評価をしないことが重要である。

第三段階…解決策を評価する。

第四段階…双方が納得いく解決策を決定する。

第五段階…解決策を実行に移す。

第六段階…結果を評価する

勝負なし法は以上の段階をふんで行なう。ただ、当然のこととしてこの方法で対立した問題が全て解決するわけではない。しかし双方が納得のいく解決をめざす点においては民主的なものといえるだろう。

以上、親業における基本的三つの方法を簡単に紹介した。これらを知っているだけでより一層、コミュニケーションが建設的なものになるだろう。

(2) 親業に関する研究

柏木恵子、鈴木乙史らによる親業訓練の効果についての調査研究を以下に紹介する。¹⁰⁾

1) 調査方法

調査の被験者は大きく二つのグループに分けられた。まず(A)親業訓練講座の受講生である母親及びその子どもたちのグループが一つと、もう一つが(B)受講生群との比較のための受講生でない一般の母親及びその子どもの普通統制群である。

2) 親子間の問題解決にどう役だったか。

母親が子どもとの間にあると感じている問題が、親業受講により実に74%が解決されたという結果になっている。

3) 育児態度の変化

親業訓練を受けることにより、育児に対する自信を深め、子どもとの別離感を強めたということである。この母子一体感の減少は統制群と受講後の母親との比較のほうより鮮明に出ている。

4) 親の態度変化(CCP調査)

子どもは親が思うほど好意的に親の態度を受けとっていないということである。しかし、受講後は親子共に拒否的傾向の減少、受容的傾向の増大を示している。

5) 訓練効果に対する母親の認知

親自身の内面的精神的な安定性、充実感を高め、それを基盤としながら子どもや他の人への受容的な態度として現れ、これが結果として子どもの行動に良い影響を与えていることがいえる。また、それは子どもの成長の合わせ、自らも成長してきたいという成長欲求の活性化へと進んでいくようである。

6. 親業を具体的に取り入れる試み

(1) 親業を取り入れるための問題提起

ここでは具体的試みの前に、この親業の価値をはたして家庭の中でいかしきれのかという点について少し考えてみたい。まず、夫婦の対話の実態について、押さえておくことにする。

夫婦がどのような話題をもって会話をしているかについて資料をみていきたい。以下に示すのは夫婦の話題ベスト5である。⁴⁾

表2 夫婦の話題ベスト5

	①ゼロ型(%)	②有職I型(%)	③有職II型(%)	④均等型(%)
1	子どものこと 83.3	子どものこと 79.8	子どものこと 75.5	子どものこと 69.7
2	社会的な出来事58.0 ・ニュース	社会的な出来事57.8 ・ニュース	夫の仕事・職場59.5	夫の仕事・職場61.4
3	夫の仕事・職場50.6	夫の仕事・職場54.2	社会的な出来事57.9 ・ニュース	妻の仕事・職場53.2
4	大きな買い物・48.7 レジャー	大きな買い物・45.3 レジャー	妻の仕事・職場46.2	社会的な出来事53.2 ・ニュース
5	近所づきあい 43.0	近所づきあい 33.7	大きな買い物・45.0 レジャー	大きな買い物・42.3 レジャー

(注)

①…専業主婦世帯

②…妻の収入が扶養範囲内の世帯

③…妻の収入が扶養範囲を超え、かつ均等型以外の世帯

④…妻の収入が夫の収入の6割以上の世帯(ただし、夫の収入が

250万円未満の世帯は除く)

出典：博報堂生活総合研究所「90年代家族・お金の流れが家族をかえる」1989年

また、別な調査¹¹⁾によると、やはり夫から

聞きたい話、聞いてもらいたい話のトップも『子どものこと』であった。つまり、子どもの存在が夫婦の対話のテーマを提供しているということなのだろうか。

また同じ調査の中に夫婦げんかを取りあげたものがあるが、それによると「夫婦げんかをするか」の問いに対して「頻繁にする」…4.8%、「時々する」…35.0%となっているその原因は「夫の態度」「子どもの問題」「夫の帰宅時間が遅い」が数多く上げられている。

つまり夫婦の一般的会話の中心話題は子どものことであり、そのことは特に、妻が夫と協力しながら子育てをしていきたいという意識の現れと考える。だからこそ、その話題で夫婦げんかになることも多い。また、違う側面からげんかをみれば夫のことが原因である場合が多く、そこから妻の夫に対する不満をみてとることができる。

今回、親業を取り入れるにあたり、まず父親からの試みをはじめようと考えているのも、そうすることによって、少なくとも夫婦げんかの回避やさらに問題解決に向けての前進がみられるのではないかと思われるためである。そして、夫婦仲のさらなる改善と子育てにおける母親の精神的サポートの大きな鍵になっていくにちがいない。

しかし一方で、筆者自身が問題と考えるのは現代社会人の多忙さである。いくら対話をしたと望んでも、コミュニケーション・タイムがなければ意味がない。夫婦についてみれば、実際どれだけの対話時間があるのだろうか。

北海道教育大学札幌分校社会研究室による『共稼ぎ家庭の実態調査』¹¹⁾によると、対話のできる時間は出勤前のわずかな時間帯と帰宅後の1~2時間といったところである。また、これを夫婦にかぎってみれば平均対話時間が平日で1時間19分、休日で2時間24分という数字がだされている。¹¹⁾

この少ない対話時間の中で、いかにその質を高めていくかが問題となるだろう。

最後に筆者が非常に問題意識を持っている部分について述べておきたい。たしかに親業は対話を充実させ、人間関係をより深いものにするための重要な方法の一つと考えられるが、筆者自身の経験でいくと親業の技法を意識して用いるときそれ自体、相手によって非常に困難に感じることがあるという部分である。つまり多くの場合は身内に対してである。私たちの対話の歴史が『説得』の歴史であり、個人を尊重した民主的対話がまだまだ行われているとはいいがたい家庭において、親業のような対話形式はまことに照れ臭いものである。親業訓練講座のインストラクターも「この実践は夫婦、親子ほど難しいですよ。」と語っていたのが印象的である。しかし、難しいからといって試みなければいつまでたっても問題は解決しないのである。大切なのは我々自身が意識することであり、努力することであると考えます。

(2) 簡易親業講座

簡易親業講座は正規の親業訓練講座ではなく筆者自身が親業の内容を簡単に紹介し、実践の可能性についての資料を得ることを目的として行ったものである。内容としては基本的な三つの手法について演習問題を用意し、それに対して用紙記入、またはロールプレイしながらこれらの手法を体験してもらった。(参加者は50代男性1名、40代男性2、30代女性1、20代女性1、計5名である)

- 参加者の感想をまとめると次のようになった
- ・相手のメッセージに対してフィードバックするのがたいへん難しい。
 - ・親業を使った対話をするためにはかなりの訓練が必要だろう。
 - ・「能動的聞き方」の手法は全く初めてで、こんな聞き方があったのかと思った。

つまり、親業を実践するためにはある程度の演習が必要であり、受容的に話を聞く習慣のない私たちにとって日頃から相当そのことに対して、意識を持つことが重要であると考えます。

また、参加者は全員が今回のような手法を知

らなかった。したがって一人一人の個人、家庭から実践していくことに意味が感じられた。

(3) 自己評価表の作成

親業を取り入れるための予備的試みをするために、次のような親業チェック表を作成した。

以下の項目について、できた…○、できたともできなかったともいえない…△、できなかった…×の三段階で評価する。

表3 自己評価表

年月日			
対話時間			
場面			
相手を否定しない(表出メッセージ)			
・ (内的側面)			
相づちをうつ			
相手の気持ちをフィードバックする			
相手に意見するときは肯定的メッセージで			
相手を見ながら話を聞く			
ながら聞きはしない			
自由記述欄			

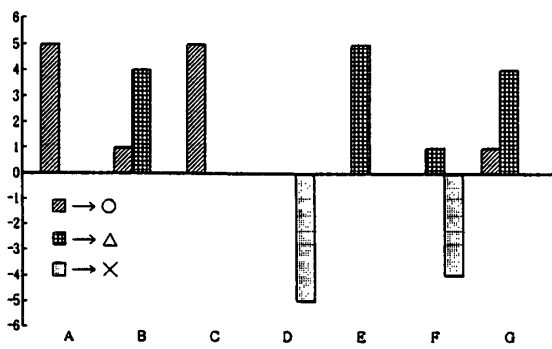
(4) 親業の試み

今回は親業に関心のあるA氏の協力を得て、予備的試みを行うとともに、筆者自身も同じような試みをすることでより一層の理解をもって本研究を進めていきたいと考えている。

A氏に対しては上記の自己評価表を渡し、家庭における妻との対話場面についてチェックを依頼した。また筆者自身もA氏と同じように自己評価表を用い、わが子の育児を担当してくれている母親との対話場面をチェックした。

まず、A氏のチェック表についてであるが、グラフに表すと以下ようになる。

また、実際やってみた感想をA氏は「相手の話に対して耳を傾けるようになった。また、忙しい中にも話す時間が増え、内容も豊かになっ



- A. 相手を否定しない（表出メッセージ）
- B. " （内的側面）
- C. 相づちをうつ
- D. 相手の気持ちをフィードバックする
- E. 相手に意見するときは肯定的メッセージで
- F. 相手を見ながら話を聞く
- G. ながら聞きはしない

図1. A氏の自己評価

たように感じられる。そして、夫婦がより仲良くなった気がする。一方で、評価表によるチェックは自分に対して一つの姿勢を要求している。それはいつも相手を理解し、思いやる心を背景に話を聞く態度を意識させるものである。いつも些細な事から始まる口論もかなり避けられた。意識することが重要と思う。夫婦仲が良いことは家庭教育の中で重要である。このような試みはやってみることに意義がある。もう少しやってみたいことは夫に対して対応に変化はなかったか、妻の立場でどのように感じたかというチェックをしてもらいたい。また、この対話法を妻にも知ってもらい、ともに実践していくことが望ましいと思われる。」と述べている。

A氏は今まで何気なくかわされていた対話を意識することによって、対話そのものの質が変化していったように感じている。また、対話自体が豊かさを増すとともに夫婦関係改善へと向かっていった印象をみる時、この試みの発展の可能性は高いと思われる。

A氏は「議論はやりやすいので、相手の思いをいったん受け止めて、気持ちをくんで話をするのが苦手である。」と語っており、このよう

な手法をもって相手の話を聞く習慣を身につけるには一朝一夕にはいかないかもしれない。

筆者自身も自己評価表のチェック項目を意識して母親との対話を試みてみたが、相手の気持ちをフィードバックすることが苦手な点においてはA氏と同じであった。しかし、それはあくまでも身内に対しての照れくささからくるものであり、この情の葛藤を克服しなければならない難しさを感じる。実際の試みにおいては相づちをもって聞くことがほとんどであった。しかし普段、孫の世話でストレスをためている母にとって他愛のない話を聞いてくれる相手がいるということで筆者の不十分な受容にもかかわらず、そんな時は機嫌が良く、穏やかに見えた。いろいろな課題を抱えながらも、まずは相手と向かい合う、そして話を聞く気持ちがあることを相手に理解してもらっただけでも一歩前進とみるべきであろう。

また今回、母親との対話以外にわが子との対話を同じように試みようと考えたが対話時間があまりとれなかった。そこで行ったのが『手紙』による対話である。筆者自身、対話の中ではなかなかできなかった『気持ちのフィードバック』を文字にするとすんなりできた体験を通し、これは対話時間の少なさをカバーするのみでなく、対話のもう一つの形として有効ではないかという印象をもった。

コミュニケーションは相手に対しての思いやりの姿勢をもつことが基本である。このことをいつも意識しながら対話に臨むことが技法にまさる重要な点であろう。

7. まとめ

現在、家庭における人間関係の稀薄さが問われているが、心の奥底ではだれもが人と人との心の触れ合いを求めている。

わが国における生活様式も個人主義化が進んできたが、本当の意味で個人が尊重され、認められているものなのかを確認していかなければならないだろうし、その中に人間の心を感じて

いきたい。夫婦関係、親子関係を改めて見直す必要がある。その出発点はお互いの理解であり、そのためのコミュニケーションからである。

本研究で取り上げた親業はお互いの理解を深め、一人の人間を認め、尊重していくという視点では優れた方法の一つであると考えている。しかし、これはあくまで技法であり、それを使うのは生身の人間であるだけに非常に難しい部分であろう。しかしながら、我々は日々成長していく存在であり、意識することによってどんどん変化していくことは可能なのである。

親業に関する予備的実践の結果、A氏にしても筆者自身にしても、まず相手の話を聞くという姿勢を持つと意識したところから始まった。やはりこれによって聞く態度が今までとはちがうものへと変化していった経過と、たとえ微細なものであったとしても、相手が今までよりさらにこちらに歩みよってきているという状態をみてとれることからしても、親業という一つの技法の効果と発展の可能性が認められた。

今後、対話のための方法を家庭の中に浸透させていくためには、さらにこの試みを続けていくとともに対話の手法を習慣化していくことが重要と思われる。またこの手法を家族員に知ってもらうことも必要であろう。

本研究の予備的試みを通して、いかに対話において相手を理解し、さらにそのことをフィードバックしていくことが難しいかを実感したわけであるが、だから諦めるのではなく意識したところの努力から出発したいと思うのである。家庭再構築は当然、簡単なものではなく、こう

した地道なところから始まる。

謝 辞

本研究をすすめるにあたり、仲間である特別専攻科学生の皆様方とA氏に大変お世話になりました。深く感謝の意を表します。

文 献

- 1) 奥村晶子(1988)：子どもと家族，ミネルヴァ書房
- 2) 田中孝彦(1994)：人が育つということ，岩波書店
- 3) 伊藤友宣(1985)：家庭のなかの対話，中公新書
- 4) 平井信義(1993)：新・父親の辞典，きょうせい
- 5) 高橋種昭(1994)：父性の発達，家政教育社
- 6) トマス・ゴードン(1990)：親業・ゴードン博士 自立心を育てるしつけ，小学館
- 7) 岸田博(1990)：来談者中心カウンセリング私論，道和書院
- 8) トマス・ゴードン(1970)：親業，サイマル出版会
- 9) 近藤千恵(1993)：「親業」に学ぶ子どもの接し方，企画室
- 10) 親業訓練協会(1983)：研究調査報告－親業訓練の効果について，おやぎょう，第12号，2～3
- 11) 夫と妻のコミュニケーション（資料），労働法学研究会報，34(26)，28～34，(1983)